令和7年度〔 自己評価報告書 〕

学校番号	学 校 名	校 長 名
34	川崎市立新小倉小学校	田中 康子

学 校 教 育 目 標	今年度の重点目標
新しい自分をつくる 未来をつくる	新しい時代の学校の基礎となる教育課程の創造～自己選択・自己決定～

	評 価 項 目	具 体 的 な 取 組	成 果 と 課 題	具 体 的 な 改 善 策
1	確かな学力を育む学習活動の充実	GIGA端末の積極的な活用	校務のDX化を推進するために職員室のフリーアドレスを導入し、Googleサイトを活用した校務に完全に切り替えることができた。これにより職員のICT活用能力が高まり、授業に活用することができた。文科省のリーディングDXスクール事業の指定校として全国公開の授業を行い、子どもたちが端末やクラウドを活用し、主体的・協働的に学ぶ姿を見せることができた。保護者からもおおむね好意的な評価を得られているが、特に低学年では、GIGA端末の利用の仕方について、時期尚早ではないかという不安の声も上がっている。	GIGA端末の積極的な活用については、来年度も継続していきたい。しかし、特に低学年においては、どの活動でGIGA端末を活用していくのか、アナログで残し、確実に指導するべき内容を押さえたい。連絡帳については、低学年は従来のノート形式のものにするなど、アナログで子どもの力をつけるべきところについては、積極的なアナログ活用として位置づけたい。また、情報活用能力について系統性を明らかにして、子どもたちに育成していきたい。
2		協働的な学びの推進と学びを生かす力の育成	教室だけでなく廊下やオープンスペースなどを活用し、子どもたちが自分たちで学び方を選択し、誰と学ぶかを選べるようにする授業展開に挑戦した。主体的に学ぶ中に、協働的な学びも加えていくことで深い学びに近づけられるよう支援を行った。子どもたちは友達と学ぶことのよさを感じることができていた。なぜその友達と学ぶのかという選択の理由については深い学びのための選択になっていない場合も見られている。自分の学びのかじ取りをする際の正しい選択ができるよう、支援をしていく必要がある。また、主体性・協働性を育む新しい授業の形について、子どもに任せるだけで基礎基本がおろそかになるのではないかという不安も聞かれる。	基礎基本の定着は欠かせない。基礎基本の定着を図る場面でも主体的に取り組くめるような工夫をしていくことや単元の中で子どもに選択を委ねる場面のバランスについて、職員が共通理解を図りながら進めていきたい。また、協働的に学ぶ際に、なぜその人と学ぶのかの選択が正しくできるようにする練習と価値づけを行い、子どもたちが深い学びに辿りつけるような支援を行いたい。
3		一人ひとりに応じた支援の充実	学習を阻むのは、人に障害があるのではなく、カリキュラムの障害であるというUDL（ユニバーサルデザインforラーニング）の視点を取り入れ、学習者による学びの舵取りができる授業デザインをの実践を始めた。一人ひとりのつまずきを想定し、オプションを準備しておけるかという点で職員の研修が必要となる。また、子どもが最大限に伸びる環境の選択ができるよう保護者・本人と相談を繰り返し、柔軟に場を提供することができた。	子どもたちがどのような場面でつまずき、どのような支援をすることで学習が進んでいくのかについて、北海道教育大学の川俣先生や共愛学園前橋国際大学の桂先生との共同研究を進める中で、職員が研修し、子どもの見方、支援の方法について、アップデートを重ねていく。
4	創意工夫ある教育課程の編成	新川崎・創造のもりなどと連携し地域の特色を生かした学習活動の展開	ニデック、キヤノン、三菱自動車等の企業とのかかわりをもち、社会、理科、総合的な学習、生活科などの教科学習に生かすことができた。地域の特徴を知り、自分たちが住んでいる町への愛着を形成するきっかけとなった。また、経済労働局との連携で、近隣の起業家の方からお話を伺い、アントレプレナーシップにつなげる考え方を学ぶ授業の実践も行うことができた。	アントレプレナーシップの考え方を実践的に学ぶ授業については、バージョンアップしたもので来年度も高学年で実践していきたい。また近隣企業だけでなく、小倉のまちに古くからある夢見ヶ崎動物公園、小倉神社などとの連携も図っていきたい。

5		多様性を学び、広い視野を育む多文化共生教育の充実	3年生では、中国、韓国、ベトナムについて講師に来校していただき、文化を学ぶことができた。外国だけでなく、お互いの中でも人はそれぞれ違いがあり、それを認め合うことが大切であることを学校のコンセプトとして伝えたことから子どもたちは、多様性について受け入れている。広い視野を育むという点で、3年生以外にも何らかの取組が必要である。	多様性については、継続してお互いを認め合うという視点から認めていくことで育成できると考えている。広い視野をもてるように、さまざま文化に触れ合える経験の機会を意図的に設定したい。
6		安心安全な学校生活を送るための環境整備とルールづくり	避難訓練、引き取り訓練、防犯訓練等を行い、有事の際にどのように行動するかを全校で確認できた。現在は、校舎の収容能力よりも児童数が少ないため、廊下などで児童が走っても大きなけがにつながる事案は発生していないが、これから児童数が増えていくことを考えると、校舎内での安全な過ごし方についてのルールの確認を行っていく必要がある。	児童会、児童指導部会等を活用し、子どもも大人も意識して安心、安全な学校生活にするために自分たちがどのように行動するべきかの指針を提示し、実際の行動が伴っていくかを確認していく。
7	人権尊重教育の充実	自分の大切さとともに他の人の大切さを認める力、他の人の立場にたって考える力、お互いを認め合う力、自分の考えを伝えて共感的に理解しあう力の育成	学校生活全般で常にこのことを意識した指導を行うことができた。支援教育コーディネーターを中心にスムーズな情報共有や研修、教育相談を行った。各クラスでも担任が子どもを信じ、子どもが自分で新しい自分をつくる努力を待つ姿勢で接することができた。職員が威圧して子どもの行動変容を促す方法を使わずに児童指導を行う力がついた。	学校のコンセプトについては、年度初めに明確に打ち出し、今年度築いてきた文化を研修や日々の指導の中で、新しい職員に伝え、継続していく。
8		いじめは絶対に許さないという強いメッセージとともにつくる他者意識	アンケート調査や日々の子どもたちの声に耳をかたむけ、トラブルの早期発見に努めることができた。指導の中で他者はどう感じるのかという視点を子どもに持たせ、相手がいやと感じることをしないということを繰り返し伝えてきた。また、いじめ防止基本方針について子どもたちにも伝え、いじめが法律で禁止されていることも伝えることができた。	継続して取り組んでいく。いじめは絶対にしてはいけないと思う子どもの割合が100％になるように粘り強く問いかけを続ける。
9		一人ひとりの児童をありのまま受け止め大切にする学校づくり	発達特性を含め、多様な子どもたちのありのままを大切にすることができた。丁寧に子どもに向き合い、対応することができた。それらが学校評価アンケートにも現れている。学校に足が向かない児童とどのような目標を共有し、子どもの成長につなげていけるかを考えていきたい。	子どもが成長するためにどのように子どもを理解し、支援していくか、保護者と学校が同じ方向を向き、協力して子どもを育てるという考えをさらに啓発していく。

学 校 関 係 者 の評 価	学校運営のまとめ
開校初年度ではあったが、第1回の学校運営協議会を開催することができた。その中で、子どもが主体となって活動した校歌づくりについて、高い評価をいただいた。また学校が新しい時代にあった学びに転換していることを受け、大人も学んでいきたいという前向きな意見もあった。保護者がもっと学校に協力できる場面があることも示唆いただくなど、外国籍保護者なども巻き込みながら地域も協力して、学校運営を前向きに支えたいというご意見をもらうことができた。	開校1年目ということもあり、保護者・地域の方が温かく見守り、多大なる協力をいただくことができた。その中で、子ども・保護者双方から高い評価をいただけた。何より転校を余儀なくされた子どもたちのほとんどが学校が楽しいと回答してくれたことが一番大きな成果である。新しい川崎の教育を創造するというキャッチフレーズの通り、午前5時間授業、リーディングDX事業についても一定の成果がみられ、最先端の授業を実践でき、新しい時代の教育課程の創造という令和7年度の重点目標も達成できた。来年度は今年度のよさを継続しつつ、コミュニティスクールでご意見をいただいた保護者も学校で学ぶ機会をつくることなども含めた「地域とつながる」という点に重点を置いた学校運営を進めたい。